京大URA報告
「京大の10年後の姿をイメージして」

01. 大学経営の壁を越える「IR」

May 29, 2017

京都大学 学術研究支援室

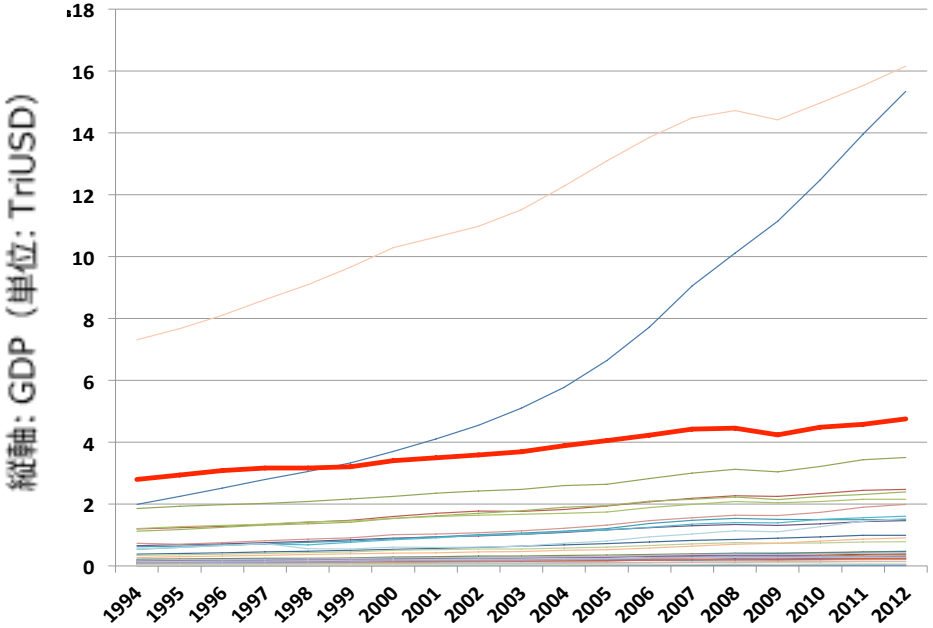
河本 大知

世界経済指標とアカデミア研究指標とのアナロジー

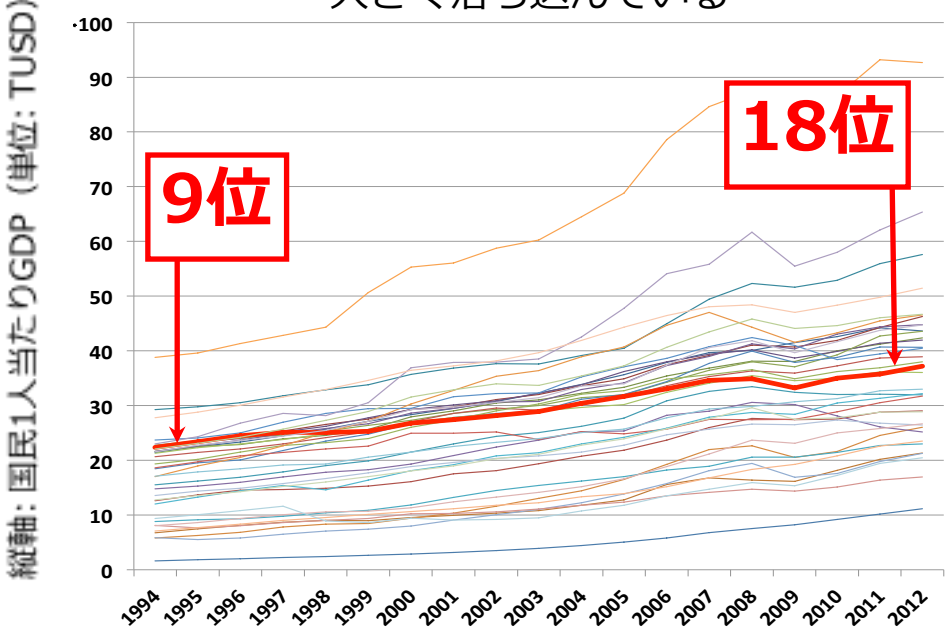
▷ 世界経済指標についての分析 by David Atkinson

- 「日本人の多くが『経済大国＝技術力や勤勉さ』など、その国の人々の資質や社会が影響していると勘違いしている」
- 「日本が世界第2位の経済大国になったのは、日本の人口が他の先進国と比較して、相対的に多かったからです。人口増加が止まった1990年には『生産性向上型資本主義』を目指すべきでしたが、いまだにその意識は足りないと感じます」

日本: GDPは長い間高水準だが横ばい



日本: 国民1人当たりのGDPは大きく落ち込んでいる



(*) OECDデータに基づく

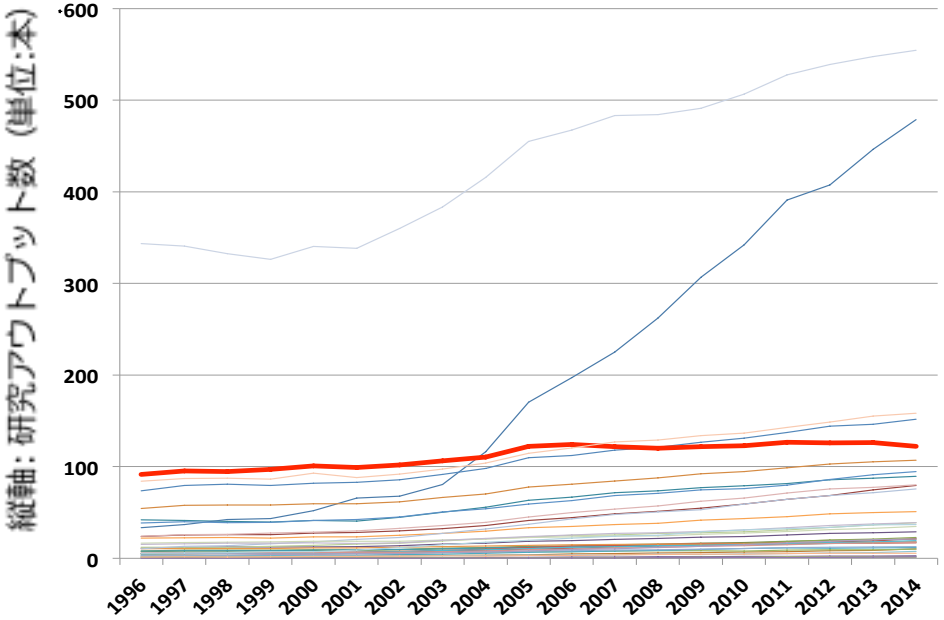
世界経済指標とアカデミア研究指標とのアナロジー

▷ 類似の「現象」が、アカデミアの世界でも起きている。（書誌データ上での話）

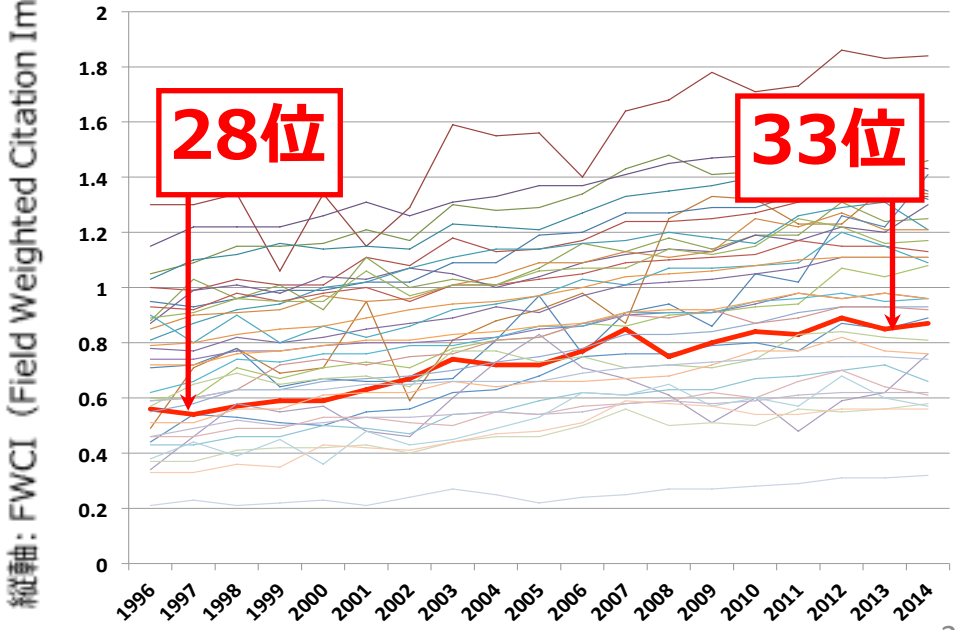
- 日本は研究アウトプット指標で世界第5位。しかし、研究インパクト指標では20年前の低水準より更に低下している。
- 殆どの研究インパクト指標において、少なくとも書誌データ上では、日本ひいては本学は、世界で決して高い位置にいない。

→現状を正しく理解することが、正しい研究推進戦略を打ち立てる出発点となる。

日本: 研究アウトプット数は高水準だが横ばい



日本: “研究インパクト（FWCI）”では、20年前より更に大きく落ち込んでいる



(*) Scopusデータに基づき、「研究アウトプット」として論文・カンファレンスペーパー・レビューの3種について計上

“生産性”の向上 ＝ 研究者環境の改善

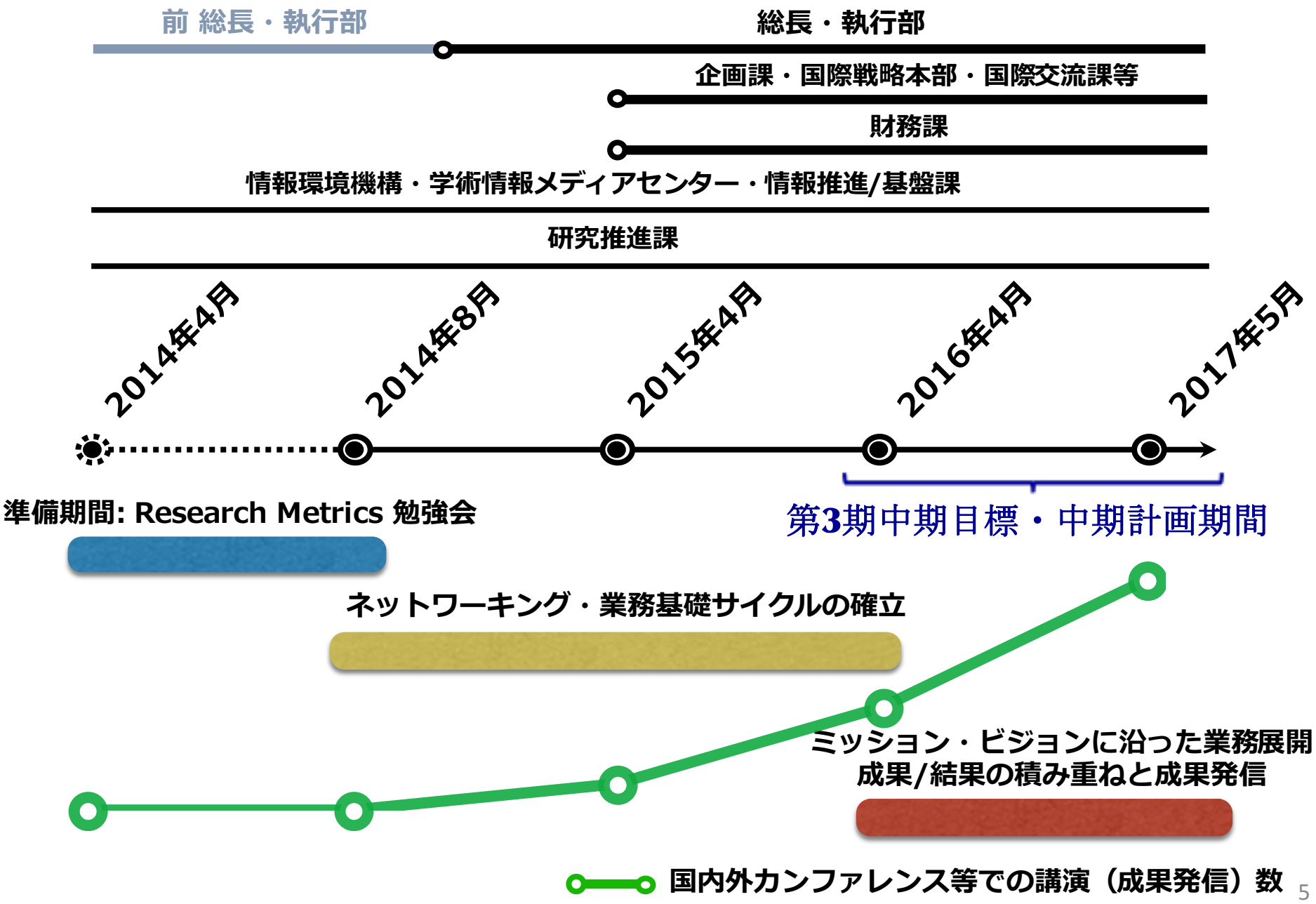
↑

全学の研究・研究者の現状の的確な把握、理解

＋

多角的な視座に基づく研究推進戦略策定・実装

“研究力”分析チームの立ち上げ



“研究力”分析に関わる業務概要

大学・国内での業務

- 大学中長期計画策定へのコミットメント
- 執行部への研究推進戦略・国際戦略に関わる提案
- 各種主要部会・委員会へのコミットメント
- 各種世界大学ランキングへの対応、分析

(*) イメージ図

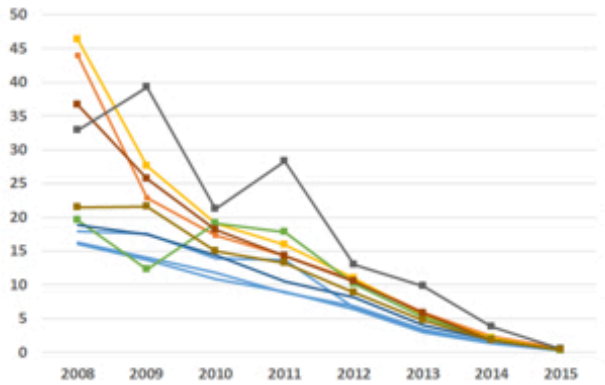
(*) イメージ図

海外での業務

- 海外研究大学・研究機関・ファンディングエージェンシー・その他海外機関・企業との協働ネットワークの確立
- 国内外主要研究力分析関連会議・カンファレンス（海外URA協議会（米国、ASEAN地域、オセアニア等）含む）での講演・パネル登壇
- 共通の課題に対する他大学URAないしIRオフィスとの協働
- 海外研究大学部局長会議での講演・討議

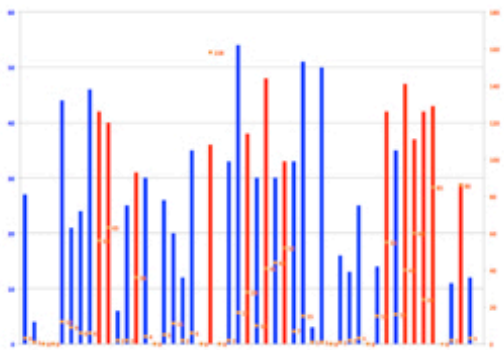
“研究力”分析に関わる業務事例

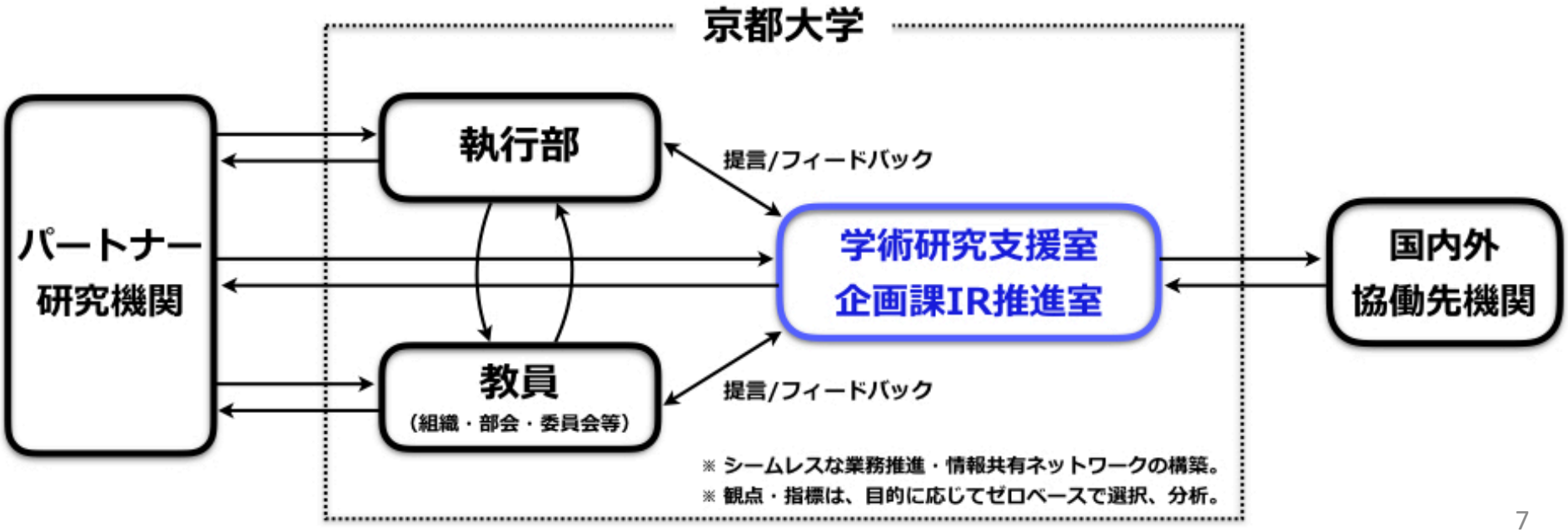
職階別研究パフォーマンス分析
（過去8年分 本学教員データ）



強み研究領域での 研究・研究者ダイナミクス分析
（過去5年分 本学教員+共同研究者データ）
※ ジャーナル分野分類に依らない観点

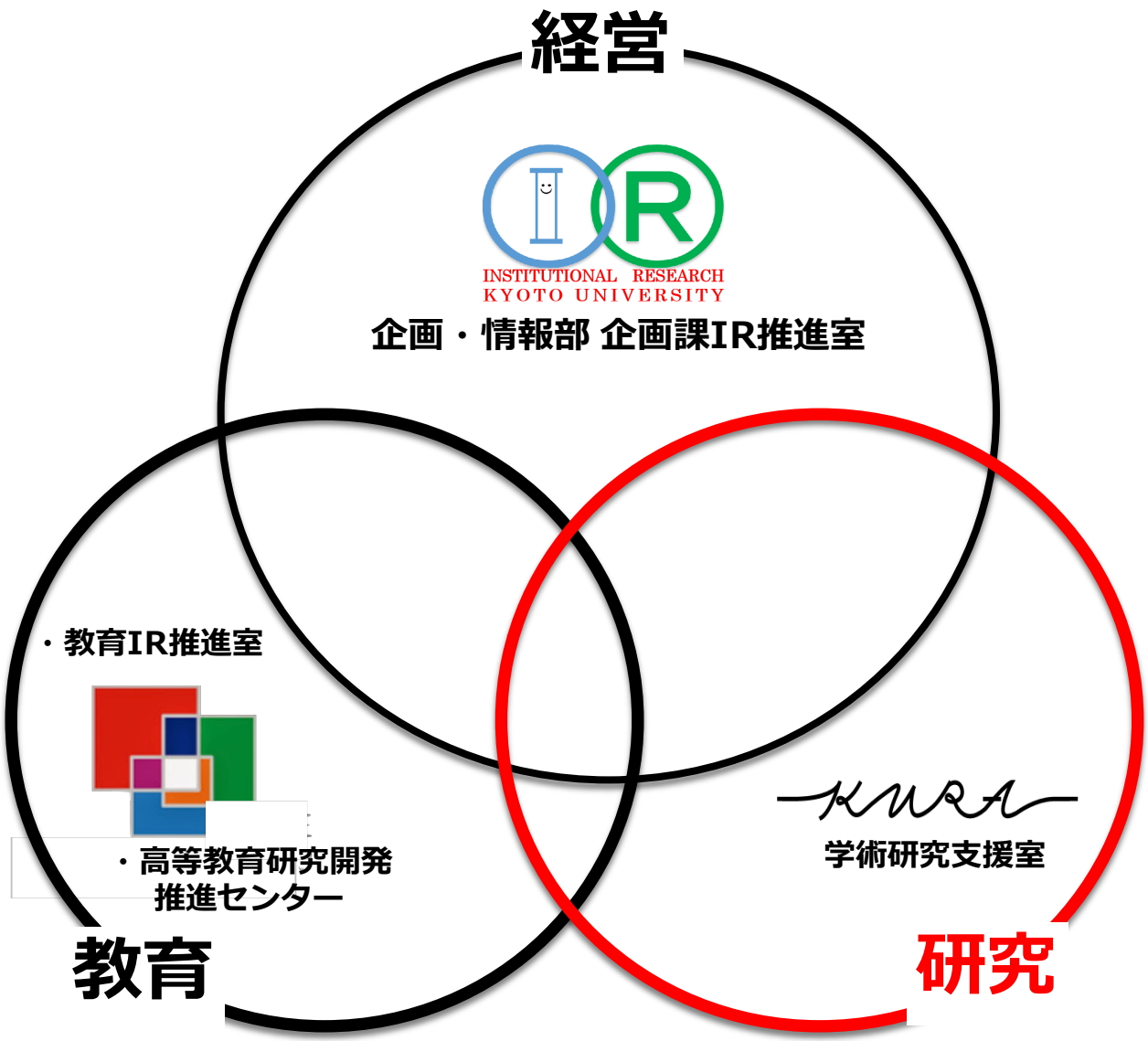
海外研究者からの “レピュテーション”分析
（過去5年分 本学海外招聘データ）





※ 普遍的結果を得た時、中央省庁を含めた他機関ならびに関係者へ共有し、全国での議論を牽引し、築いた流れに於いて本学の研究推進戦略を結実させる。

京都大学”Institutional Research”: 体制図



Institutional Research for Research: ビジョン

分析と組織デザインの力により、広く社会のコンテクストにおいて
京都大学を再定義し、
その文化と芽を持続的に育む仕組みを創出する

↓

10年後、20年後の大学のあるべきビジョンを明確に描き、大学の進むべき方向性を示す

Institutional Research for Research: 今後の取組

**構想・指針策定時に
リードする役割**

**パートナー研究機関、
協働機関と
常時コミュニケーション**

**分析基盤・技術の深化
実質的結果への結実**

Institutional Research for Research: 10年後

10年後、20年後の大学のあるべきビジョンを明確に描き、大学の進むべき方向性を示す。

- 全学の研究・研究者や取り巻く環境の変化について、現状・動向についてリアルタイムに把握、執行部・教員との距離が近く、主要な構想策定・部会・委員会での当該テーマの指針策定に於いてリードする役割がある。
- 世界中の研究機関や企業その他団体との協働状況を多角的に把握、重要な戦略的パートナーと当事者同士ですぐコミュニケーションできるラインがある。
- 分析とデザインを軸にした学内外データの統一基盤構築・分析技術の深化を、新たな「実質的結果」へと結実できるサイクルがある。